

---

# 赤く染まった白い夜叉

† 白夜叉 †

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤く染まった白い夜叉

### 【Nコード】

N7376H

### 【作者名】

十白夜叉十

### 【あらすじ】

いつになく平凡な日々を送っていた坂田銀時。しかし、ある日…ある手紙が………

## †プロローグ…傷だらけの男（前書き）

お読み頂、感謝申し上げます!!どぞっ!

†プロローグ…傷だらけの男

ザアアアア……

あ  
れ

なに……してんだ……

俺

.....

ど  
う  
だ  
.....  
う  
う  
.....



臭工  
.....

身体中.....痛くて.....

動け……………ねえや……………。

銀時は壁にL字型にだらしく倒れこんでいた。

身体はボロボロで、あちこち泥などが服に着いており

雨に打たれ……………

そして……意識は朦朧としていた。

## †プロローグ…傷だらけの男（後書き）

ありがとうございます！

## 第一訓 ある手紙（前書き）

ただの自己紹介っばい…、後半がまあ話です見たいな

## 第一訓 ある手紙

ここは万事屋。

そこに、1人の男がいきなりをかきながら、ジャンプを顔に、昼寝をしていた。

「があゝ……ぐおぐぐぐ……」

「何にも来ないアル……」

酔昆布を噛りながら体操座りでソファーに座っている1人の女の子が口を開いた。

「仕方ありませんよ……」

女の子の言葉を返す1人の男の子。

お茶を片手に、昼寝をしている男を見ながらため息をついた。

「んがぁぁ……ごぉお……」

……あ？」

ようやく昼寝をしていた男が目を覚ました。

彼の名は坂田銀時。

銀髪天然パーマに魚の死んだ様な目をしている。

本人によればいざと言うときは煌めくらしい。

普段は、このようにだらしない怠け者のグータラで、金に汚い男なのだが、

剣の腕は本物。

いざと言うときはこの剣の腕を発揮し、あの夜兎の王、鳳仙まで倒した男である。

しかし、剣の腕だけでなく、身体能力まで並み外れていて、

攘夷時代、天人との戦で、《白夜叉》と異名を付けられたほど。

自分の武士道を貫き通す本物の“侍”



「やっと起きたんですか」

銀時を保たれ気味に見ながら言った。

この男の子の名は志村新八。

ひよんな事から、万事屋に通っているいわゆるツッコミ役である。

銀時とは違い、きちんとしている。

剣の腕は、まあ、出来る方である。

「グータラ人間が」

銀時に向かい、いきなり毒舌を放つ女の子。

この子の名は、神楽。

宇宙最強民族夜兔族の天人である。

傘を使い、戦う。

銀時とは、ひよんな事から万事屋に住み込み。

父はあの夜兎の王と呼ばれた鳳仙と並ぶ程の実力者。  
今は、宇宙を飛び回っているえいりあんばすた！。  
いわゆる掃除屋、星海坊主である。

さらに、神楽には兄がいて、名は神威。春雨の第7師団である。

「うるせーんだよ毒舌酢昆布娘」

「はいはいもういいですから。」

「あーだりいゝ……」

あん？何だ？お前等、シケた面して」

「依頼が来ないヨ」

「ふーん」

また寝る体勢に入った。

「銀さん……」

はあ…とまたため息をついた。

その時。

「うおおおおああ！」「」

”ピンポン”

ドダダダ！！！！

三人は同時に玄関へもうダッシュして行った。

「お届けものでーす」

飛脚のオッサンだった。

「お呼びじゃねーっんだよ！」

「依頼かと思っただのに台無しアルうう！」

「落ち着けエエエ！！！！」

飛脚はバッキンボツコンとフルボツコに。

「手紙？」

「銀さん宛てッスよ」

「何て書いてアルネ？」

「今読む今読む！」

カサカサと横向きの封筒から、かなり薄い紙を出し、開いた。

-----

今、貴方を迎えに行きます

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-



## 第一訓 ある手紙（後書き）

その手紙に書かれている意味とは!!???

第一訓 2 危険信号 と謎の天人たち（前書き）

非常————に短いです!!!!!!

第一訓2 危険信号 と謎の天人たち

グシャ！！

見た途端に紙を握り潰した。

手紙を見たと同時に、頭が危険と告げていた。

「ちょ！銀さん！手紙を何してんですか！！」

「何て書いてたアルか？」

質問には答えなかった。

いや、答えられなかったのだ。

手紙に白夜叉と書いている時点で危ない

それに……こりゃあ一体どついつ意味なんだ……！？

迎えに行きます？

俺を……殺す？

迎えに逝きます？

なら……っ！

こいつらがあぶねえ！

俺は即座に万事屋を出た。

「ぎ、銀さん??!!」

「銀ちゃん!!」

とにかく走った。

しかし、行く宛でもないのに何をしているんだ。

できるだけ、遠くに……いった方が……！！



だが、息が直ぐにあがってしまった。

「……っ……はぁ……はぁ……」

歳だな。

全然遠くにこれてねえじゃん。

家の近所じゃんんん！！！

あー！

つくそ！

心配っ！！

「！」

どうしたら……

すぐさま、腰にある木刀に手をかけ、抜いた。

「居るだろ

出てきたらどうだ？

ストーカーさん

「

すると、路地裏から無数の天人が。

しかも、反対側の路地裏からも。

軽く100は越えてんな…

特に焦る様子もなく、見回しながら思った。

天人の手には刀。

.....

## 第一訓 2 危険信号 と謎の天人たち（後書き）

急に出てきた天人たちの正体とは！？

## 第二訓 天人襲撃（前書き）

無駄に空白多し…………すみません、読みにくいと思います…………!!あ  
と感想ありがとう!!

## 第二訓 天人襲撃

ゆっくりと辺りを見回しす。

「フン……………」

俺と殺ろってかい？」

返事はない。

ただ、銀時を囲んでいる。



「…………ま、

刀ア構えてる時点で……

殺りあうつつもりらしいがなア……？

そんなに命がいらないらしい」

笑みを浮かべ、いつかかってきてもいいよう、

木刀を構え、警戒体勢だ。

天人どもは口を全く開かない。

動きもしない。

ピクリとも。

話す気はねえのか……？

1人疑問を浮かべていた。

目は、休むことなく天人どもに配られる。

「…………じゃ…、

誰の指示かを吐いて貰おうか…………」

力のない目に力を入れ、

眼光を浴びせる。

反応は一切なかった。

「……………何？」

「オタク等人形？」



そう言い、木刀の構えを緩めた時だった。

囲んでいた天人どもが中心にいる銀時を定め、

一気になだれ混んできた。

銀時はそれを見逃さない。

すかさず、地面に蹴りを入れた。

真っ直ぐ真上に飛ぶ。

下の天人どもは、仲間同士でぶつかり遭っていた。

飛べる所まで飛んだ後、そのまま急降下し、

木刀を構える。

勢いのまま、木刀を振るった。

辺りにどでかい音が鳴り響く。

その途端に砂煙がたちこめた。

周りが全く見えない。

天人どもは焦っているようだ。

そして、銀時は砂煙から飛び出した。



飛び出した所の砂煙は風が通ったようにポツカリと空いている。

飛び出した銀時は、天人と剣を交えた。

「てめー等がその気なら……」

容赦はしねーぜ」

殺気がこもった言葉が

天人どもに寒気を走らせた。



## 第二訓 天人襲撃（後書き）

ついに……銀さん大暴れ！？

## 第二訓 2 白夜叉の反撃（前書き）

大分遅れました……何か失敗しました……期待はしないでください  
な…

## 第二訓2 白夜叉の反撃

対立していた天人を力任せに薙払った。

「おらあああああつ!!!!!!!!!!」

バキイイイ!!!!!!



木刀を振り、一氣に何体もの天人を殴った。

「！」

後ろに何かをしようとしている天人を察知し、

即座に、姿勢を低くし、しゃがみこんだ。

一泊遅れて、頭の上から風が、一瞬通り過ぎる。

頭を狙ってやがった。

そのまま、体を回転させると後ろの天人に回し蹴り。

休むことなく木刀を振りつつける

「……お……お……お……」

ダ  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ン  
ッ  
ッ  
!  
!

次々と天人を薙ぎ倒しているが、一行に減らない。

「……ッッ!!」

っくっそおおおおっ!!」

減っているわけではない

増えているわけではない



「キリがねえ！

ちくしょおおお！」

遠慮なく攻撃を繰り出すが、数がかわらねえ

起きやがった!!!!!!

な.....!!!!

!

木刀でもいつきりぶん殴られといて!!

起きやがった!!!!

そうかつ!!!

ずっとおきやがってたんだ!!!

.....! !

刀で……やるしか……

刀……!!」

俺は、落ちている天人の使っていただろう刀を発見した。

すぐさま、その刀に目をつけると、

天人の攻撃をかわし、防ぎ、避けながら、

刀へ転がりこんだ。



刀の柄を握る感触を、確かに感じた。

絡まっている記憶の糸をたどり、体に

昔の感覚を、

キイイイインー！……！！

思い出させた。

天人の一斉攻撃を、

防  
い  
だ。

弾き返す

「!」

ザ  
ン  
ッ

ザ  
ン  
ッ

音が鳴り響く

ザンッ

キンッ！

刃と刃が交じりあう音

肉を斬る音





辺りは、一面に真っ赤で染まった。

### 第三訓 白夜叉の想い（前書き）

放置してすみませんでしたアアアアアア！！！！

私情がありまして、更新出来ませんでしたm（――）m

でも、また復帰しますので、応援よろしくお願いします！！

### 第三訓 白夜叉の想い

ポツポツ

ざああアアア

ポツポツと降り出した雨は、次第に激しさを増した。

銀時は壁に凭れ、目は虚ろになり頭はガクンと垂れ下がっている。

先程まで居た天人は、真一字に切り裂かれ、地面に横たわっている。

屍。

血がドクドクと溢れ出している所から見て、もう死んでいるか、生きていたとしても、恐らく長くはない。

白き夜叉が歩み、繋いだ道には、屍の山ができ、人々を恐怖に貶めた。

白き羽織りを真つ赤に染めた夜叉を見たもの達の所からは、  
いつからか、ある言葉が流れ始めていた。

その男、銀色の髪に血を浴び、戦場を駆る姿はまさしく夜叉。

だと。

戦場が静寂に包まれ、黒煙が空へ上がる中、屍の上に佇む夜叉を見る。

その目は、酷く哀しみで染まっていて、見たものを惑わせた。

あの目は何なのだと。

誰もが疑問を抱いた。

白き羽織りを真っ赤に染めた夜叉は、まさに冷酷な奴では無いか。

そう思う人も、少なくとも無いのだ。

ただ、その夜叉は、ある想いを心に抱き、刀を振るった。

復讐。

？

憎しみ。

？

哀しみ。

？

彼が抱いていたのは

：

### 第三訓 白夜叉の想い（後書き）

意味不明ですね。

知ってます。分かっています。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7376h/>

---

赤く染まった白い夜叉

2010年10月8日13時43分発行